

12 十五の森の悲話

今から 530 年前の明応 3 年(1494) 6 月 29 日、美しい 15 歳の娘さんが、村の人柱となったことはご存じでしょうか。

村人は、この悲話を忘れないことが娘さんの供養になるとの思いで今日まで語り継がれてきました。

- (1) 史跡十五の森 p312
- (2) 十五の森の供養と伝承 p313
 - ① 観音寺の供養、
 - ② 伝承活動・事業の年表、
 - ③ 小野小学校のクロガネモチ、
 - ④ 旧矢野宅から観音寺まで水が送られていた。
- (3) 十五の森のおはなし..... p316



松河戸文化科学探求隊
隊長 長谷川 浩
080-3657-7052
松河戸町の沿革ホームページ
<http://matsukawado.com/>

(1) 史跡十五の森

市の指定文化財史跡（昭和 37 年 11 月 1 日指定）となっている「十五の森」は、中央線勝川駅から南へ 1Km ほどの愛知電機(株)南側駐車場の中にあります。

昔、この辺りは一面水田でした。

松河戸村絵図(天保 12 年)P155 をみると、「十五薬師塚」は庄内川の西の喰違近くの「そぶ池」と書かれた場所にあり、近くには「堤越」、「砂入」などといった庄内川氾濫の跡を示す地名が残っている場所があります。



「十五の森」の治水伝説は、室町時代、今を去る 530 年前、明応 3 年（1494）の旧暦 6 月のことです。

この地区では、雨期になると庄内川が氾濫して田畑がよく水浸しになっていました。

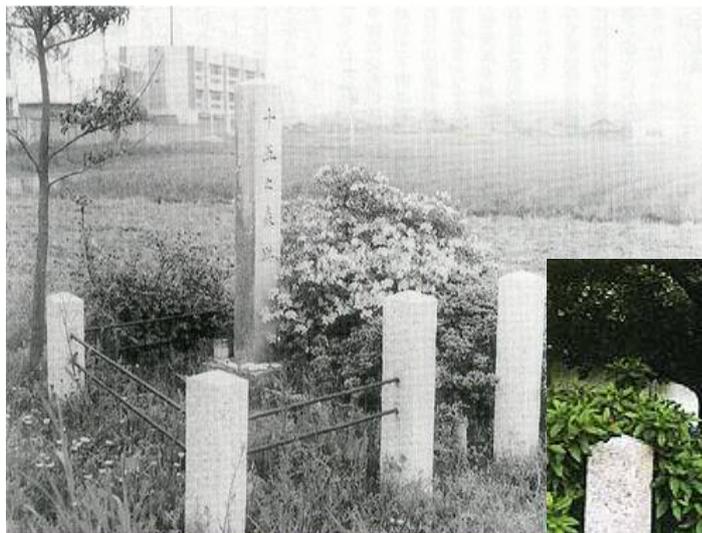
村人達がどうしてもこの水害を避けられるのかと途方に暮れていると、そこへ陰陽師が現れ「水神様の怒りを静めるためには、15 才になる娘を人柱として埋めればよい」と告げました。

そこで 15 才の娘をもつ親たちがくじ引きをした結果、庄屋矢野家の娘が人柱に決定しました。

悲嘆のうちに棺に入れられた娘は、6 月 29 日に堤のよく切れる場所に埋められてしまいました。娘はそれから 1 週間近く棺の中で生きていて、一緒に入れた鐘を叩く音が地中から聞こえたという事です。

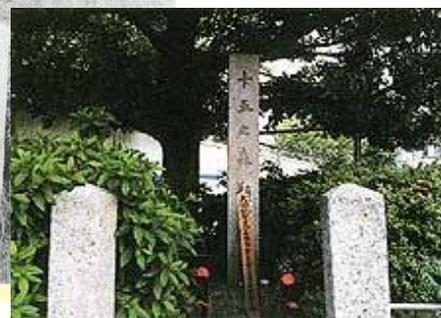
それから水害もなくなり、平和な村となったということです。

この跡を「十五の森」と呼び、村人達はクロガネモチを植え小祠を建て「薬師如来」を安置しました。



十五の森（昭和 40 年代撮影）

十五の森跡（昭和 40 年代）
田んぼの中にある。



十五の森跡（令和 2 年）
現在、周りは愛知電機の駐車場となっている。

(2) 十五の森の供養と伝承

① 観音寺の供養

江戸時代の中頃の享保7年(1722)に記された観音寺の木板「十五薬師記」には、その後、小祠が荒廃してしまったので、政保2年(1645)春に現在の観音寺に薬師如来を移したことを伝えています。

しかし、木板は黒ずんでしまい、今はほとんど読めない状態です。

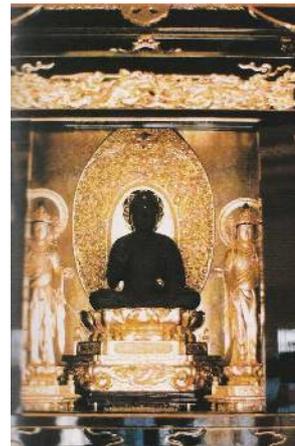
十五の森塚は、大正時代に碑とクロガネモチを植えて供養しており、命日(6月29日)と道風祭時(11月3日)には愛知電機、遺跡保存会により慰霊祭を行っています。

また、薬師様の縁日(毎月8日)には、十五の森伝説に関する衆寮堂に祭祀されている「十五薬師如来」と観音寺門前の「十五の森親子地藏尊」の前で法要を行っています。

観音寺の門前には、娘さんと娘さんの母の霊を慰めるために昭和44年5月5日、石の「十五の森親子地藏尊」が十五の森遺跡保存会によって建立され、そのかたわらには、「十五の森の親子地藏由来」(安藤直太郎 撰)が石に刻まれています。



十五の森親子地藏尊
向かって親地藏の右に子地藏、
左に由来記



衆寮堂に祭祀されている
「十五薬師如来」



十五の森薬師如来の法要
左が秋葉大権現 中が道風霊神 右が十五薬師如来



十五の森塚供養



観音寺十五薬師記 (観音寺所蔵)

十五の森と十五薬師如来について書かれた額です。享保7年(1722)にお薬師様を修復し開帳供養した際にかかれたもので、十五の森に関する記録としては最古唯一のものである。現在字が薄れ判読が困難である。

観音寺十五薬師記

扶桑国東海道尾州春日井郡松河戸邑観音寺薬師寺如来は菩薩僧行基氏の手に出で儼乎たる聖容、靈感殊に勝れて在るが如し。原夫れ邑は尾城の良に在りて河水前に連り田圃後を逃る。故に動もすれば激湍横流し、民家往々にして河伯の災に遇い、田圃も亦損壞す。屢々堤防を構ふと雖も水災を避くこと能はず。此に於て邑人謀して以て閘を作り、男女、長幼を論ぜず、其の閘に当るものを以て生きながら水底に沈めて鎮護ならしめんと欲す。而して矢野氏の女、其の閘に当る。實に是れ明応三年(一四九四年)甲寅六月二十九日なり。邑人之を憐み、地域を封じ樹うるに木を以てし葦をその上に作り、而して腎王如来の像を安置し以て童女の冥福を追修す。その女年始めて十五歳、稱して十五の塚と曰ふ所以なり。爾來水災起らず、田圃も亦其の所得今に到り一邑水災を蒙らざる者、實に是れ童女神靈の賜なり。然りと雖も多く年所を歴て堂宇傾頽し尊像も亦風雨に爛る。邑人之を悲しみ廢宇を邑の民家の間に移し転々一ならず、邑中今猶薬師井あり。靈水と稱し他に異なる所以なり。

正保二年(一六四五年)乙酉春 邑人香火の便を思ひ、堂宇を寺の境内に移す。慶安二年(一六四九年)己丑年 邑中時疫を患ふもの多し。謹で宝帳を開く、二十七日夜以て祈願す。靈感殊に空しからず。後復扉箱を歴て堂宇頽る。尊像を本堂の傍に転移し此に年有り、享保五年(一七二〇年)庚子の春 住僧雪堂 靈蹤の隠然たるを嗟嘆して自ら衣資を捨て或は四方の檀度に募り新一宇を営み尊像を彩修し以て旧觀に復す。客歲丑の冬(一七二一年)公庭に訟一今年壬寅の春(一七二二年)二月十三日より三月二日に至る。開帳供養し此の所由を以て予に告げ記して來永に貽さんと欲す。野納隨喜し梗概を略記す。伏して願くは、堂宇永く法論を固め常に転じて以て国家の福となさんことを、然らば則ち童女惟々永却の沈淪を出づるを得るのみならず更に見聞の衆生をして同じく無上の報果を得せしめん。時に享保七年(一七二二年)歲次壬寅二月十二日壽昌幻寄船杜多謹んで記す。

② 伝承活動・事業の年表

元号(西暦)	内容
明応3年(1494)	6月29日、十五歳の娘が人柱になる。村人は薬師堂を建てて少女の霊を慰める。
政保2年(1645)	春、十五の森の祠が荒廃したので、薬師如来を観音寺に移す。
享保7年(1722)	観音寺十五薬師記が書かれる。
明治25年(1892)	10月十五の森にあったクロガネモチが小野尋常小学校(現小野小学校)に移植される。
昭和4年(1929)	12月、小野尋常小学校(現小野小学校)が現在のところに移転し、クロガネモチも一緒に移植する。
昭和37年(1962)	11月、十五の森が市指定文化財の史跡になる。
昭和44年(1969)	5月、十五の森親子地蔵が遺跡保存会によって建てられる。
昭和57年(1982)	地元の人たちの協力で小野小学校のクロガネモチの最初の大規模な枯救助作戦がおこなわれる。
平成6年(1994)	十五の娘さんの500回忌法要が観音寺で盛大に営まれる。
平成22年(2010)	3月、十五の森の改修工事行方。
平成23年(2011)	3月、地元の人たちの協力で、22年7月から行われた小野小学校のクロガネモチの大規模な枯救助作戦が終了

③ 小野小学校のクロガネモチ

小野小学校の運動場にあるこの木(クロガネモチ)は、もと十五の森にあったもので、明治 25 年(1892)に松河戸八反田にできた小野尋常小学校に移植されました。

その後、昭和 4 年(1929)になって今のところに学校が建てられると、この木もここに植えかえられました。

運動場の南東の隅に植えられましたが、今では運動場の拡張により北東に位置しており、樹齢 130 年とされています。

この木は、生徒にとっての遊びの友達でした。みんなで木に登って遊んだりもしました。

しかし、昭和 57 年頃になると木の勢いがなくなってきました。

伝統のあるシンボルの木を枯らしては一大事ということで、当時の PTA 会長はじめ学校の先生方が造園業者を呼んで根本的治療をおこなった結果元気になりました。

このこともあって、昭和 57 年から木製の柵も設けました。

現在も定期的に治療を行っていますが、最近の大規模な枯渇救助としては、地元の人たちの協力で平成 22 年 7 月～23 年 3 月に行いました。



現在も小野小学校の子供たちを見守っているクロガネモチ

昭和 57 年に設けられた当時の木製の柵

写真 平成 3 年頃



小野小学校校庭のクロガネモチ

写真 平成 3 年頃

④ 旧矢野宅から観音寺まで水が送られていた。

戦後もなく防火水槽を掘ったとき、節を抜いた竹の筒が出土したことがありました。

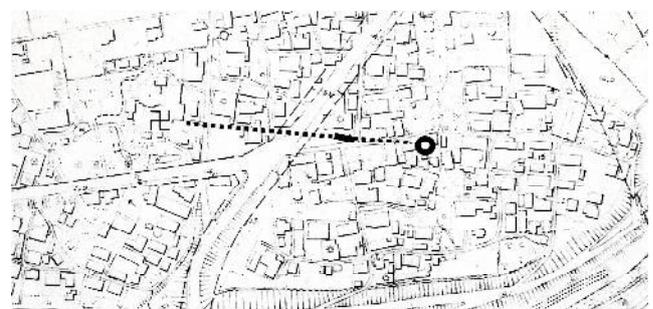
昔、矢野家から観音寺へ水を引いていた跡だろうと思われていたが、今回の区画整理が行われた際、図のように、旧矢野家から観音寺の衆寮堂に筒が引かれているのが分かりました。

昔、占い師が、お薬師様が矢野宅(井戸)の水が飲みたいと言うことで水を送ったとのことでした。

衆寮堂には、十五の森薬師様、小野道風公、秋葉様が祀られています。



「竹の水道管」出土場所 (写真:松河戸歴史研究会)



● 観音寺 ● 矢野家 「水道」推定経路 ——— 「竹の水道管」出土地

松河戸文化科学探求隊

隊長 長谷川 浩

080-3657-7052

松河戸町の沿革ホームページ

<http://matsukawado.com/>

(3) 十五の森のおはなし「春日井のむかし話」から 春日井市発行 春日井郷土史研究会

十五の森

—松河戸町

庄内川は暴れ川でなあ、洪水のたんびに一番低い松河戸村に流れこんで家や畑を流し、田をどろどろにするのじや。

そのたんびに村人は知恵を出し合い、力を合わせてなあ、洪水を弱める堤や水はげようする溝をこしらえたのじやが、大洪水には勝てなんだ。

明応三年（一四九四）のことじや。

その年も梅雨が近づくとな、村人はまづ神様に、（洪水から村を守ってくださいえ、そして豊作にしてくださいえ……）とお祈りして、庄屋様の「村を守る手を考えついたら、どんなことでもええ、出し

てください。」の口火で相談を始めたわ。「ずつと考えとるが、もう何もねえ。」とあきらめかけたところへ、陰陽師（古いやまじないをする人）が通りかかってこんなお告げをしたわ。

「十五の娘を人柱に差し出して堤を造り直されよ。人柱は神様が行き来なさる御柱になることじや。そこで直に神様にお願いなさることじやな。」とな。

みんな仰天したわ。人柱なぞ誰も恐ろしくて考えてもみなかつたわ。

「人柱は生きてまんま人を土の中に埋めるんじや。そんなむげえことやれるか。」「やらんと神様に直にお願ひできん。そのおかげで村が救われりや、やってみるこつちや。」

年寄りもはげしいことをたいがいやって

きたからいえたのじやろ。

庄屋様がふりしぼるような声で、「人柱は最後の手と思つたが……。」という、すぐにはかの村人が、「十五の娘は庄屋さんとこ、兵六さんとこ、それに元さんのとこ。御三人が受けてくださりやすぐやれますぞ。」といった。

兵六さんも元さんも言さめて庄屋様を見上げた。自分の娘にそんなむげえことやれるか、助けてくださいえと訴える日してたわ。でも庄屋様は厳しい顔になって、

「くじで決めましょう。決まった人は娘を村にくだされや。どの子もええ子ばかり。誰もが人柱になれるでなあ。」といながらくじを引くと、庄屋様にあたつ

てしまった……。

庄屋様は、体がふるえてくるのをぐつとこらえて「人柱は名譽の役、ありがたうお引き受け申します。」と深々と頭をさげたと。

娘をまん前に、横に母親を座らせた庄屋様は、お面のような顔をして、

「人柱は神様に仕えること、お前に村の

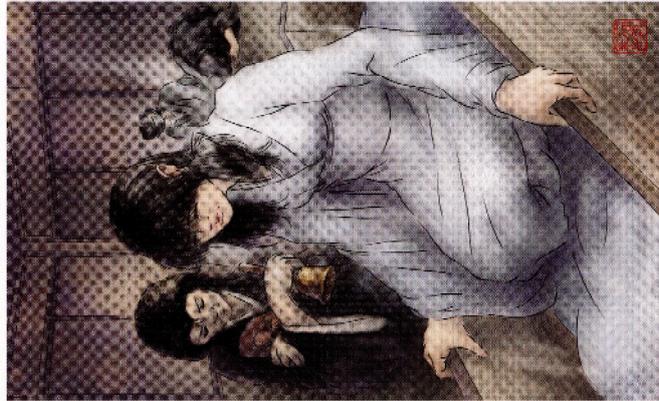


命がかかっている。」といい聞かせた。

娘は黙って聞き、眉一つ動かさなうだ。取り乱したのは母親の方じや。

「大事な娘を堤の底へ埋めるなんて、そんなむごいことができますか。私がかわつて人柱になります。」

しかし、庄屋様は娘の顔を見つめ、手をつき頭までさげた。



「よいか、神様に村の苦しみをようお話しせよ。お助けくださるよう一心におすがり申せ。」

娘はしばらく黙っておつたが、やがて娘の目から涙が一粒こぼれた。

「父様のおいづれどおりに神様のもとへまいります。」ときつぱり答えた。

その日から娘は体も心も神様のもとに行けるよう、食べ物をかえて身を清め、お経を唱えて心を美しくした。

庄屋様は鎮守の森の木で、娘に持たせる仏様をほつた。母親はボロボロ涙を流し、娘の花嫁衣裳

だと、白無垢の着物をぬい続けた。

村には、匠（大工）の家から娘を入れる白木の箱をつくる音が悲しくひびいたと。

田植えの前だ。母親の仕立てた花嫁衣裳を着て、庄屋様のほつた仏様を手に娘は白木の箱に入れられ、村人たちにかつ



がれて堤の底に埋められた。

庄屋様も母親も、堤に毎日通つて耳をすりつけ娘をよんだ。チリンチリンという鈴の音とともに「なむあみだ、なむあみだぶつ。」と唱える娘の音が、しばらく聞こえたと。

それから、松河戸村が大洪水におそわ

れることはなかつたそうじや。人柱を埋めた堤には薬師様がまつられ、木々が植えられて、森になったそうじや。

十五の森の悲話メモ